

前思春期から青年期にかけての 母親との関係の変容過程

—粘土造形によるイメージ表現から見る—

大 橋 沙也佳

〔抄 録〕

本研究は、前思春期、思春期、青年期と経ていく中で、母親との関係がどのように個人の中で捉えられ、どのように変容していくのかを、イメージ表現を通して追っていくことを目的とした。粘土造形により、それぞれの時期の母親との関係のイメージを表して貰い、それを基にインタビューを行った。

2事例を中心に検討を行った結果、前思春期から思春期にかけて、自己と母親の対象化がなされ、それに伴い、一方向的な関係から母親を個として自覚して相互的に関わる関係へと変容していくことが示された。また思春期から青年期にかけて、分離してだけでなく、母親と相互理解を目指し、関係の完成形に向かうようなイメージ表現も見られた。母親との関係において、自分とは異なる一個の人間として捉えなおした上で母親を受け入れる過程と、自己の個性を見出していく過程が相補的に進んでいくと考えられた。

キーワード：母親との関係、前思春期、思春期、青年期、粘土造形

1 問題と目的

1.1 問題

思春期に入る直前の10歳前後の時期は前思春期と呼ばれ、ライフサイクル上の重要な転換点としての意味を持つ。前思春期には、抽象能力が増大し、相対的な視点でものを考えるようになり、自己と世界の対象化が生じる。西村（1978）によれば「十歳頃から子どもの心性とは異なる客観的態度や抽象能力が発達する。客観性や抽象性を獲得した子どもは、一度極端におとなしくなり主観性を離れるが、まだ人格の基礎は子どものままなので主観と客観をゆれ動く」という。自我体験（西村、1978）が生じ、外的世界との隔絶が生じて孤立感を伴うこともある危機の時期でもある。

それに続く思春期は、子どもから大人へと移り変わる過渡期であり、身体的にも心理的にも大きな変化が起こる。中井（1978）は、思春期の患者について「児童期の治療は一見めざましくても思春期の安全な通過を保証するところまでは行かないことがむしろふつうである」と述べているが、このことは、思春期の訪れがそれまでと根本的に異なるあり方への変化をもたらすことを示しているように思われる。

本論では、第2次性徴の発現とそれに伴う心理的变化の時期を「思春期」、思春期の準備段階としての直前の時期を「前思春期」、思春期に続く心理・社会的側面を含む成人期の前段階としての時期を「青年期」と位置づける。

前思春期から思春期にかけて、最初の愛着対象である母親への絶対的依存からの脱却が起こってくる。Blos（1962／1971）はそれを「第2の分離個体化期」と位置づけ、青年期を親からの精神的離脱と個の確立の過程として捉えた。親からの精神的離脱とは、児童としての同一性に変化が見られ、親と距離を取るとともに同性友人関係がより親密になっていく過程である。またSullivan（1953／1990）は、依存的な関係から自立した個人として他者と関係を結ぶ関係への転換の時期とし、その基礎となる同性友人関係をチャムシップと呼び、発達過程における重要性を指摘した。

三好（2006）によれば、青年期における同性の友人関係（チャム）は、青年期における“保護と変容の器”として機能しており、それまでの依存対象である母親からの分離に伴う喪失感や主体の揺らぎを保護するものであるという。

また河合（1996a）は、前思春期の少年を主人公としたファンタジー作品について論じ、家族の日常的な守りから離れた時に、子どもは非日常の世界を体験することが多いとしながらも、その世界からの帰還に“母の守り”が重要な役割を果たすと述べている。

こうした母親の守りの機能は、三好（2006）が指摘するように、徐々に同性友人関係に移行していき、相対的に重みは減っていくと考えられるが、自己の基盤として、この時期を支えるものであると思われる。そして、その母性の包含する機能（河合、1977）が否定的な意味を帯びて体験されるときには、発達を阻害する重い課題ともなりうる二重性を持つであろう。

これらのことから、分離個体化や自立といったことが、依存から脱することのみを意味するわけではなく、その時期に応じた適切な関係を結んでいけることが重要であると考えられる。では、他の関係に移行することで分離していった母親とは、その後どのように関係していくのだろうか。

社会学者のChodorow（1978／1981）は、女性は男性に比して明確に母親との分離がなされず、同一化を保ったままであるとし、思春期の女性が「母親に同一化し、同一化するよう期待されるのは、大人の女性である母への同一化を達成し、大人の性役割を学ぶためである」が、同時に「自己を独立した個人として感じるに十分なだけ分化しなければならない」と述べ、女性の母親との関係における独立と融合の葛藤を描き出している。

また橋本 (2000) は、母親の立場から見た母子関係について考察する中で、母娘関係における一体感と分離について「母息子関係では、母と息子のあいだに性差という生物学的な差異があり、母親は結局、息子の中に自分と違う他者を発見する。息子は母の世界から出ることによって、性同一性 (ジェンダー・アイデンティティ) を手に入れる。母娘関係の場合、娘が個としてのアイデンティティを手に入れるためには母との同一化から脱却しなければならないが、娘が性同一性を確立するためには母との同一化が不可欠というむずかしさをはらんでいる」と述べている。母親への同一化から脱却し分離していくには、母親との差異をもとに母親を自分と異なる他者として自覚することが必要であり、そのため、性同一性の獲得が課題となる思春期から青年期においては、母親との性差が大きな要素となる。

橋本 (2000) はまた、「母親であることにともなう一体感と分離のテーマは、繰り返され、何度もめぐってくる」と述べ、子どもとの分離は母親にとっても大きな課題であり、生涯を通して繰り返されるものであるとしている。

これらの研究においては、前提として、依存から分離へ向かうことが発達の上で達成すべき課題であると想定されている。しかし、分離を達成することが強調されてきた一方で、その先にも続いていくはずの関係性がどのようなものであるかはあまり語られてこなかったように思われる。個ということが実感されてくる前思春期から思春期の過程においては、分離や自立が強調されるのは自然なことであるが、個別性を確立することと依存や一体化は対立するものなのだろうか。三好 (2006) の指摘にあるように、他の対象との間で同様の関係が再現されることはむしろ健康なことである。母親との間においては、分離を通してどのような関係の変化があるのかが重要なのではないだろうか。

本研究では、前思春期からの過程において、一体感と分離ということ、達成すべき課題というだけでなく、関係性の質の変容という視点で見ていきたいと考える。母親は、多くの人にとって人生最初の重要な対象であり、母親との結びつきは根源的なものである。そのような母親との関係の質を見ていくには、言語的に語られる面のみでなく、イメージとして表現されるものにも注目したいと考えた。

以上のようなことから、本研究では、前思春期から青年期にかけて、母親との関係における一体感や分離の様相がどのようなイメージとして存在し、どのように変容していくかについて考察する。その際、前思春期から思春期、青年期と経ていく中で、母親との関係がそれぞれの時期においてどのように捉えられ、どのように変容していくのかを、個人の体験に密着して事例的に検討することを目的とする。

1.2 方法の検討

思春期・青年期の親子関係についての近年の研究には、水本・山根 (2010)、池田 (2006)、金政 (2009) などがある。しかし、質問紙等を用いた量的研究が多く、個人の中での母親のイ

メージやその変容を追うものではない。親子関係に関する研究でイメージを用いたものとしては、やまだ（1988）の女子学生を対象とした「幼いときのあなたとおかさんの関係をイメージして自由に絵に描いてください」という調査があるが、「幼いとき」という抽象的な教示によるものであり、またそこから現在までの過程を明らかにするものではない。思春期は、親離れや心理的離乳の時期といわれるように、母親との関係が変化する時期である。関係性の質の変容を捉えるには、どのように思春期を通過してきたかをプロセスとして見ていくことが必要である。

イメージを捉える方法としては、描画や箱庭、粘土などが考えられるが、本研究では、心理療法でも用いられる素材である粘土に着目した。

安原（2006）は、触覚とは「外界を認識するというよりも、そのことを通して自分の内部に働きかける感覚」であると述べ、自己を知るための基本的な手がかりとして触覚を意味づけ、治療的な役割に言及している。また片畑（2003）は、箱庭制作における身体感覚について、「触覚を介することで、制作者の『内的な感覚』と箱庭との距離が小さくなり、決定した位置に対して『ぴったり感』をより感じることができた」と、触覚の重要性を述べている。

このような触覚の重要性に加え、粘土が持つ独特の重量感や可塑性、弾力、ちぎったりまたくっつけたりでき、何度も修正がきくなどの性質は、深いレベルでの母親との関係における一体感や密着感、分離や境界のあり方などのイメージを表現する媒介として適していると考えた。このようなことから、本研究では、粘土を用いて母親との関係のイメージを表現して貰い、それについて語ってもらうという方法を取ることとした。

なお、母娘関係については数多くの研究があるものの、母息子関係について扱ったものは少ない。Chodorow（1978／1981）や橋本（2000）の指摘するような母娘関係の特異さについて、母息子関係と比較しながら検討したいと考え、男女を対象にすることとした。

2 方法

調査対象：A大学の学部生、大学院生12名（男性6名、女性6名）を対象とした。年齢は19歳から26歳、平均年齢は21.5歳であった。調査協力者（以下、協力者）には、「母親との関係」についての調査であること、粘土を使用することは伝えてあった。

調査時期：2009年11月に実施した。

道具：使用したものは、210グラムの油粘土、粘土板、粘土べら4本であった。また、協力者の了承を得た上で、ICレコーダーによる録音、デジタルカメラによる作品の写真撮影、ビデオカメラによる手元の撮影を行った。

手続き：平野（2007）、やまだ（1988）、安原（2006）などを参考に、以下に記す独自の調査方法を設定した。

調査は心理相談室として使用されている面接室で、机を挟んで調査者と協力者が対面する形で、個別法で行った。

実施する前に「母親との関係について、粘土を使って表してもらい調査であること」「途中でやめたくなったらいつでも中止してよいこと」「話したくないこと、言いにくいことは話さなくてよいこと」を伝え、記録のための機材の使用について了承を得た。

まず、粘土に触ることに対して嫌な感じがしないかを確認し、「粘土に慣れてもらう時間を取るので、何か作ろうとは考えず、手になじむまでこねてみてください」と教示し、協力者が十分であると思った時点で終了した。

次に「現在のあなたと母親との関係をイメージして、それを粘土で表すとしたらどのようなものになるか、作ってみてください」と教示した。できあがった時点で写真撮影をし、作品についてどんなイメージであるかを尋ねた。その後は調査者の方からは、特に質問項目は設定せず、語られた内容に沿って、詳しく尋ねる質問や、明確化するような質問を行った。同じように、「あなたが、自分にとって思春期だったと思う時期」「思春期に入る少し前の時期（作ってもらった「思春期」の粘土作品になる前の段階）」の順に、作品の制作を行ってもらい、それぞれインタビューを行った。

なお、思春期、前思春期については、時期の移行は個性が強いと考えられること、その人に体験された主観的なイメージをみることを目的としていることから、年齢は指定せず、協力者にとって自分がそうであったと思う時期を想起してもらった。「思春期」について、前期と後期でイメージが違うということが語られた協力者については、2個制作してもらい、合計4個となった。

最後に、「作りやすかったところ、作りにくかったところ」「粘土で作品を作ってみての感想」について尋ねた。

3 結果と考察

12名の協力者の中から、Aさん（21歳男性）とHさん（21歳女性）を事例として示す。この2人を取り上げたのは、前思春期から思春期を経て青年期へという移行の過程と、その間の母親との関係の変化が、特徴的な粘土の表現の違いとなって現れ、また粘土の作品を通した比喩的な語りとして克明に語られたためである。

類似した表現や語り、あるいは対照的な表現や語りが見られた他の事例との比較も行いながら、前思春期から青年期にかけての母親との関係の変容過程について考察していくこととした。

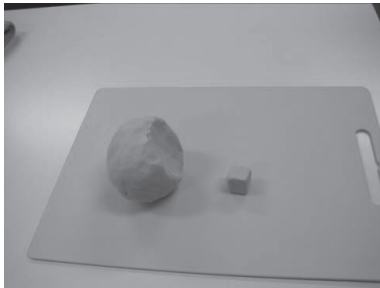
なお、調査協力者の言葉を「 」、調査者の言葉を〈 〉で表した。また、考察において取り上げる部分には下線を引いて示した。

3.1 Aさん（21歳男性）の事例

〈現在の母親との関係のイメージ〉

【製作過程】

粘土全てを丸めて球体を作る。球体を持ちながら、首をかしげてしばらく考え、一部をちぎり取る。球体のちぎった面を均す。ちぎった部分を四角に形作り、球体の横に置く。（所要時間1分27秒）[写真1]



[写真1]

【インタビュー】

「基本的にうちの母親とは、ずっと仲がいいんですよ」と語る。仲はいいが、過去に家族に起きたある出来事から母親が「すごい心配性」になり、「何かにつけて過保護的なところがある」という。

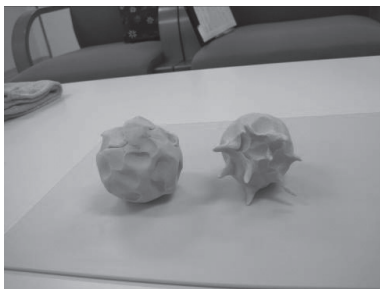
例えば、バイクを買ったが、ツーリングで遠出しようとするかと許してもらえず、「なんかそこらへんはまだ、いつになったら許してもらえるんだろうみたいな。そういうのは、感じるんでまあ、ちょっと分かってもらえない部分みたいな感じで」と、四角を指す。

その部分がなければ全部丸でおさめても良かったが、ふっとそのことが頭に浮かんだため、そこだけ離してみようかなと思い、わざと四角っぽくしてみたということだった。「四角だと、入らない感じがするんで。丸だとまだ分かり合えるかなみたいな。（略）その点まだ、自由がきいてないんで、角ばってみました」という。二人合わせてこの形だという。球体の方について尋ねると、「トゲみたいのを作っても良かった」が、「自分のイメージはやっぱ、丸だったんで、丸からあまり離したくなかったというか」「母親からトゲが出てるイメージではないんで、強いて言うならこっちなあと思ったんですけど」「たとえば四角と三角とか、全く合ってなかったら、2人、四角と三角とかでもいいと思うんですけど、まあ別に、なんも問題ないんで。丸ですかね、完全は」と語った。

〈思春期後期の母親との関係のイメージ〉

【製作過程】

球体を二つ作り、片方を手に取る。細い突起を作っては丸に戻すことを繰り返す。何度も試した後、突起を数本、球の横半分につけて置く。もう片方の球体は指で押さえてへこみをいくつも作り、突起のある球の横に置く。（所要時間9分14秒）[写真2]



[写真2]

【インタビュー】

高校生の頃のイメージ。左が母親で、右が自分。作るのに「必死だった」という。

どんなイメージかを聞くと、「基本的に仲はいいんですけど、やっぱり、まあ高校生なんで、ほっとけよみたいな部分もあって、そういう面もあるということで、ちょっとこっちの部分、トゲトゲしてみようかなと思ったんです」しかし、「これをこう（トゲの部分を上向きに）してると、全面にトゲトゲ感を押し出してる感があって。でもそうでもなかったと思うんで、あえてちょっと横向きに」と語った。

母親はどんな感じかを尋ねると「へこんです。こっちを理解しようと必死だったんですけど、（自分が）あまり理解を示さない部分」もあり、「不安やったと思う」「大変だっただろうなあ」と語る。「そういう意味でこう、ちょっとへこんでもらいました（笑）」ということだった。

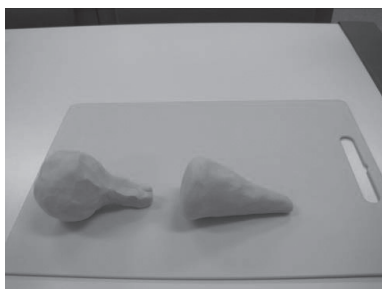
母親に心配をかけていることは、自分でも分かっていたので「自分でセーブがきいてたのかもしれない」ともいう。「（心配性になるのは）それも仕方ないって自分の中で、分かてるんで、そういう風な子になったのかも知れないですけどね、逆に、心配かけないでおこうみたいな」

心配されることに対しては、「基本的に、一步引いた目線で見れてるというか、なんていったらいいかな、冷静に受け止められてる感じはします。だからこそ、こっちがある意味、先手を打って行動できるというか、（略）セーブした行動ができる」とのことであった。

〈思春期前期の母親との関係のイメージ〉

【製作過程】

思春期後期で作った「自分」の形を三角錐のように作り変える。「母親」の球体の一部を伸ばして太い突起を作り、二つを並べて寝かせて置く。（所要時間4分1秒）[写真3]



【写真3】

【インタビュー】

中学生の頃のイメージ。左が母親で、右が自分。

「中学生になってちょっと親元離れて、親元というか親のところ離れて、すごいいろんなところに目が行ってる、（略）他を向いてるイメージなんです」「（母親は）中学の時もこっちが学校のこととかあんまり話さなかったんで、何やってるのかこいつよくわからん、みたいな感じで、ちょっとなんか、知ろうとしてる手を伸ばしてる感じ」という。

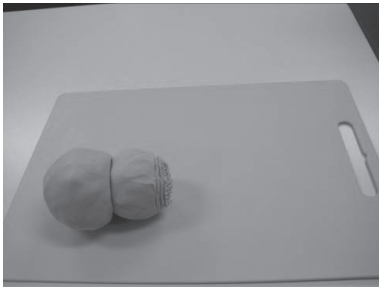
「（中学では）ほんとに、わっといろいろ入ってきたんで、そっちばっかこう、いろいろ向いてるというか、そういう意味で、親のほうは向いてなかったですね」

「高校の時よりは、ちょっと、自分の理解力がなかった分、ちょっと行き過ぎちゃう、みたいなのはあったかも知れませんが」〈行き過ぎちゃう?〉「ちょっとこっち（母親の方）にこう、そんな心配しなくていいし、みたいに。（略）でもなんだかんだでやっぱりこう、状況によってはふっとこれ（自分）がこっち（母親）に向くわけで。そういう意味では、やっぱりまだ親がほしいのかなっていうのもあったかな」また、小学校と中学校では、先輩後輩関係など、上下のつながりの意味合いが異なり、「社会的な制度」が入ってきた時期で、その当時のつながりが今も生きているということが語られた。

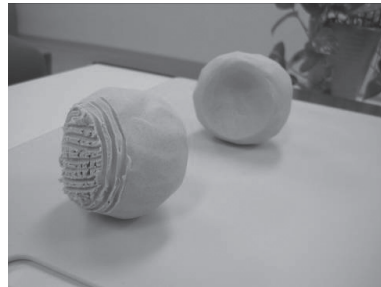
〈前思春期の母親との関係のイメージ〉

【製作過程】

思春期前期で作った「自分」と「母親」を丸めて球にする。片方（母親）の球の一部を器のようにくぼませる。もう片方（自分）を手に取り、少し迷ってから、その表面にヘラで模様を刻む。それを最初の球体のくぼみにはめる。（所要時間 2 分 50 秒）[写真 4]



【写真 4】



【写真 5】

【インタビュー】

小学校高学年頃のイメージ。[写真 4] の位置から見て、左が母親で右が自分。

「自分で作って気持ち悪いですけど、なんかすごい“甘えた”（筆者注：甘えん坊）なんですよ。なんで、親も常に受け入れ態勢があるというか。で、まあ、自分でもいつでも入っていただけますし」という。学校などで、「自分は甘えてるけど、周りはそうでもない」ことに気付き始め、こんな甘えてていいのかな、という葛藤も感じている（「自分の表面の模様のようなものが、葛藤の部分」）。

（[写真 5] のように離したり、また戻したりしながら）周りと比較して「いいのかこれ」と感じながら、「ちょっと覗いてるのもありますし、なんか、自分の中でこう、ばたついているというか。なんだかんだ言ってもこっち（はまっている状態 [写真 4]）が居心地いいんですよ」という。〈お母さんはそういう場所を用意してるみたいなの？〉「そうですね。丸でもよかったんですけど、なんか、受け入れてくれてたよなって思ったらこう、そういう場所を作ってみようかって。別にへこんでるっていう意味ではなくて、へこんでる感じはなくて、なんか場所があるよっていう感じです」ということであった。

中学に入ると、「自分に必死、外に必死」になり、ベタベタした感じはなくなり「仲のいいというその、意味合いが違ってくるといえるか。ベタベタする仲の良さではなくて、なんか、わかってるよ、みたいな。（略）あなたが言ってることはわかってるよ、って」と語った。

3.2 A さんの事例の考察

A さんの事例では、甘えている自分に葛藤し始める前思春期から、外を向くようになり母親の方を見なくなる思春期前期、「トゲトゲ」で母親を拒否する思春期後期にかけて、徐々に母親から離れていくが、現在（青年期）では、「仲がいい」という関係そのものを表す球体と、「分かってもらえない」部分である小さな四角という表現になる。A さんの場合、思春期を通しての母親との関係は、母親を「一歩引いた目線」で客観的に理解していこうとする過程であり、「自分にとっての母親」というだけでなく、母親自身の歴史やパーソナリティを、外から見て理解するという視点を持つようになることで「仲の良さ」の意味が変わっていくことであった。

「仲の良さの意味合いが違う」という語りと連動するように、前思春期から思春期にかけて、粘土造形では特徴的な前思春期との違いが見られた。

前思春期において、母親は、自分を受け入れる「場所」であり、自分に合わせた形をしてい

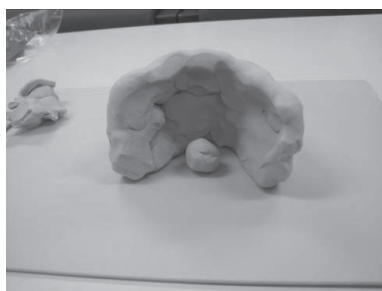
る。いわば自分を中心としてそれを取り巻くものという視点で作られているように思われる。そうした自分への葛藤が、学校という同年齢集団の中で他者の目を意識することから生じてくるのも、前思春期の特徴といえるだろう。

思春期に入ると、母親に見せない部分が現れ、母親は「知ろうと手を伸ばしている」イメージになる。ここでは母親は、自分に合わせた形ではなく、自分と似た形のものとして離れて存在している。これは、外の世界に目が向くようになり自己が対象化され、それとともに母親も母親として分化し、自分とは異なる不安を持つ別の存在として捉えられるようになっていったことを示すのではないだろうか。

この点については、他事例においても特徴的な変化が見られた。

Dさん(22歳女性)は、前思春期(小学校高学年頃)において、球体である自分と、それを包み込んでいる、内側が空洞になった半円形の母親を作った[写真6]。そして、「お母さんの考えイコール自分の考えみたいなのがあったので、同じ形にしようかなと思ったんですけど、私をその形にすると、完成されてしまったって感じがして」「この形は、お母さんに守られてるイメージでもあるので、私がその形になるとおかしいなと思って」と、自分と母親を違う形にした理由を語っている。

また、Dさんの思春期前期(中学生頃)の粘土表現では、母親は離れたところで自分を見守るクッションのような存在として表され、思春期後期(高校生頃)[写真7]、現在にかけて、完成された球体である母親と、まだ未完成な、不安定な球体の自分が作られた。自分を守るための形であった母親が、自分と並ぶ、同じ球体の完成形・未完成形で表現されていくという変化は、自己中心の世界から脱し、一方的に守る・守られるという関係ではなく、同一地平で横並びの関係を持つ対象として母親を捉えなおしていったことを示していると考えられる。



[写真6] Dさん・前思春期



[写真7] Dさん・思春期後期

Aさんの現在の作品は、一見、再び母親との一体化に向かっているようにも捉えられるが、母を自分と異なる一個の人間として捉えた上で、それを受け入れ、分かり合うということは、あえて差異を強調しなくとも個としていられることを意味するのではないか。「分かり合えない部分」を自覚しながらも、完成形としての関係のイメージを持てることは、母親との関係の発達の一つのあり方といえる。

従来、青年期においては親からの分離・自立を達成することが課題であるとされてきたが、こうした過程を経て、その後に再び一体感や密着に戻っていくとしても、それは思春期以前の原初的な一体感とは質が異なっている。どのように思春期を通過してきたかという視点を加えることで、分離の達成・未達成という側面だけではない母親との関係性を捉えることができると考えられる。

3.3 Hさん（21歳女性）の事例

〈現在の母親との関係のイメージ〉

【製作過程】

粘土の塊から塊を2つちぎり取り、板状に伸ばして波打たせ、2つを並べて立てて置く。余りの粘土からさらにちぎり取って球にし、立てた粘土の片方のそばに置く。球を置いた方の板状の粘土の上部を少し押しつぶす。（所要時間3分51秒）[写真8]



[写真8]

【インタビュー】

右の二つが自分で、左が母親。

「自分にとって母親って、父親よりも、自分にとってのライバルみたいなところがあって、なんかまだ超えられてないって感じがある。だからまだ母のほうが高く、この距離が、今距離的にはちょうどいい感じだと自分では思ってた」という。

（「自分」の板状の方を指して）「この母親に対して反ってるのは、人としては好きっていうか尊敬できる部分も色々あるけど、母親としてはあんまりって思ってたところがあって、まだ若干、反発心とまではいかないんですけど、母親とは違って思ってる部分で。母親に対してこう反ってて」右の球体は「母親に見せてない部分の自分」だが、「母親が見ようと思ったら見えるような感じのところまでは、中学生の時とかよりは見せてもいいかなって思ってる」という。「母親の方も、真ん中の部分は、私に対して反ってるけど、母親は母親で、性格として合わない部分も、違う人間だからあるのと、でも、母親も年取ってきたりして、昔は分からないみたいな感じだったけど、最近は分かってくれてみたいなのが、この縁。こっちの形に添ってきてる」

今の関係は「親と娘、っていうよりも、友達っていう感覚で付き合えてる部分も、ちょっとあるかなと思う」「母と娘ではなくて、個人対個人みたいな感じ」であるという。

「別にそこまで完璧に分り合わなくてもいいかなって思ってる部分でもあるんですけど、家族って言っても、やっぱり別個の人間だし」ということであった。

母親はHさんが幼い頃からずっと仕事をしていて、Hさんにとっては祖母が「育ててくれる人」だった。

〈思春期の母親との関係のイメージ〉

【製作過程】

「母親」の粘土をつぶして丸め、中が空洞で一面が開いた三角錐のような形を作り、開いた方を左に向けて粘土版の左端に置く。「自分（球体）」と余りの粘土を足して球を作り、別の余りと「自分（板状）」を足して板状にし、球を半分覆うようにして粘土版の右端に置く。ヘラで板状の粘土の中央上部に切れ目を入れる。（所要時間5分25秒）[写真9・10]



【写真9】



【写真10】

【インタビュー】

【写真9】の位置から見て、右が自分で、左が母親。小6の終わり頃から中学を卒業する頃までを「思春期」として想起した。

「さっき（現在）よりここ（「自分」と「母親」）の距離が開いてるっていうのと、どっちもお互いに合わせようとしてない感じというか。この時が一番、母親のことが、嫌いではないけど苦手だった時期」だった。個人的な悩みも重なり、「中2くらいの時に、中学校に行く意味が分からなくなって、一般的にいう不登校みたいな形」になる。大人として認めたくない教師もいたし、今じゃなくても勉強はできるだろうと思い、自分なりの行かない理由はあった。しかし、母親はHさんの意思よりも自身の職業上の価値観や世間体を優先するような一言をHさんにかけた。

それまでは、母親としてはどうかと思いつつも仕事を一生懸命やっていることは尊敬していたので、言われたことがすごくショックだった。「その一言で、一回そこですごい、母親と距離を、自分の中で開けてしまっ」て。中にいる球体である「母親に見せてない部分」は、今よりも大きく、見えないようにバリアしており、言っても分かってもらえないと思っていた。

そんな状態が続いたが、母親の自分に対する理解が止まってしまうのは嫌だと思い、中3の時、「話せるところまで話そうと思って、母親とちゃんと話した、話そうと思って話したっていうのが、この穴開いてる部分（板状のものの切れ目）で。ちょっとだけ、下の方は見えないけど、上の方は見えるかなって」。

母は勉強に関しては厳しかったため、行かなくなる前はテストなどは頑張っていたが、ほとんど褒められた記憶はなく、1位が取れて当たり前のようなことを言われていた。「それなら母親が今まで評価されてないところの勉強で頑張ったら、褒めてもらえるかもしれない」と思い、図工などを頑張ったり、家事などもするようになった。それらについては、すごいね、と褒めてくれたが、紙の上の勉強に関しては「そこをずっとほんとに褒めてほしくて、頑張ってたけど、中学校のそこで、ああもうこれ、どれだけ頑張ってもここでは褒めてくれないって思ってしまった。そこから他のことを探し始めた感じ」という。

Hさんから話をした、その後について尋ねると、「なんとかして、なんで学校に行かないかを分かってもらおうと思って話し合っ」て、母親も、「折れるとまで行かないけど、そういう風に思ってるのねっていう風に。（略）完全に分かったっていう感じではなく、ああそういう風に考えて、今そういう行動をあなたは取ってるのねっていう感じ」「それだけ理由があるなら任せるわ」という感じで歩み寄っていったという。この時期に、「母親的には、この子はこれだけ自分の意見を持ってるんだっていうのをたぶん、この時期に初めて私に対して思ったんだろうなって」「この時からたぶん母親は、「娘」という感じで扱わずに、一個人として扱うようにした方がたぶんこの子とはうまくいくだろうって思ってくれて」自分の方も、「母娘でもあるけど、一個人どうしの付き合いをした方が付き合っている」と思うようになったという。「そこから、私はこう思うけどあなたはどうしたいのっていう感じで聞く、話す感じになって。最終的な判断は自分でしづらいっていう感じになって」

高校に入って自分の考え方が広がった部分もあり、「あの時母親はああ思ってたのかなとか思えるようになってきて、ちょっとずつ今の形に」なったということであった。

〈前思春期の母親との関係のイメージ〉

【製作過程】

板状のものを2枚作り、斜めに向かい合わせて置く。人型を作って2枚の間に置く。もう一つ大きい人型を作り、小さい人型と向かい合わせるように置く。（所要時間 5分 50秒）[写真 11]



【写真 11】

【インタビュー】

左が母親で、右が自分。小学校高学年の頃。

母親が苦手になる前は、「好きっていうことではなく、すごいなって」ずっと思っていた。あまり家にいないので、近いわけではないが、「もうちょっと粘土があったら大きく作りたい」くらい、自分にとって大きく見えていた。自分が斜めになっているのは、母親に「近づきたい」。しかし、「近づきたかったっていうのもあるんですけど、でもやっぱり家にいないことに対するさみしさというか、なんでも母さん家にいないのかなっていうさみしさもあったんで、若干バリアができつつある」時期であるという（「自分」の両側のものがバリア）。自分は近づきたいし、見てほしいと思っているが、「自分から見えてたお母さん像っていうのが、遠のきもしないし、こっちから歩み寄りもしない」というものだった。勉強に関してはこの頃から厳しく、「なんで分からないの」という聞き方をされて言い返せずにいた。勉強で褒めてもらえない分まで、家事などで褒めて埋めてほしいと思っていたが、自分が埋めてほしいものと、母親がくれるものは「分量に違いがあるから、そこをどうにか埋めてもらおうと必死だったんでしょうね。で、そのうち頑張ることに疲れて、ここ（「自分」の正面）にガシャーンって（笑）。ああもう無理って思ったのが、思春期に突入する感じ」。このときの壁は、「ちょっとずつ横からじわじわバリアができてくるんですけど、まだでも、低いんですよ。自分を覆うほどじゃなくて、ほんとにちょっとずつ、見せない部分も出てくるみたいな。見てほしいけど、でも、っていう葛藤が。見てほしいけど、この人にここまで見られるのもなって、ちょっとずつ思いついてる」ということであった。

3.4 Hさんの事例の考察

前思春期の粘土表現を通して語られたHさんと母親の関係は、「自分は近づきたくて踏み出そうとしているが、母親の方からは遠のきも歩み寄りもしない」というものである。母親に対して「好きっていうことではなく、すごいな」と感じており、Hさんにとって母親のイメージは、大きな、理想化されたものであった。

母親に認めてもらうために勉強や家事を頑張るが、母親にはそれは「できて当たり前」であり、頑張ることを「もう無理」と感じたことが「思春期に突入する感じ」と語っている。「どれだけ頑張ってもここでは褒めてくれない」と感じて「そこから他のことを探し始めた」という。Hさんにとって、母親の要求にこたえるのは無理だと実感することは、母親と自分の差異、同じ人間にはなれないことを実感することであり、一体感を求めて同一化していく道が閉ざされる体験であった。理想像としての母親に同一化していくことができなくなったことから、自分独自の同一性を求めていくプロセスがあるのではないかと考えられる。

前思春期での語りにみられる「できたことを褒めてほしい」「見てほしい」という、母親の評価によって自己を規定されるあり方から、思春期での語りにおいては、「自分に対する理解が止まってしまっているのは嫌だ」と、「話せるところまで話」すという、母親を基準として自分を合わせるのではなく、違う人間である自分を理解してもらうというあり方への転換がある。逆にいえば、壁で閉ざす必要があったほどに母親が自分のあり方を規定していたともいえる。

思春期の粘土表現において母親との間に壁が生じた後、現在にかけて母親との関係を修復し、再構築していくのはHさんの意識的な「分かってもらおう」とする努力である。Hさんが自分から話し合いを始めるまで、母親との間は壁で閉ざされ、「言っても分からない」ものと受け止められていたが、Hさんの働きかけにより、母親は少しずつ娘の個人としての意思を尊重し始め、「それだけ理由があるなら任せる」と、認めるようになっていく。

ここでは、Aさんが母親を客観的に理解していくのとは対照的に、Hさんが自分を主張し、母親に分かってもらうことで関係が修復されていくプロセスが見られる。対照的ではあるが、どちらも母親を自分とは異なる他者として自覚し、自分の外にあるものとして関係していくという点では共通のものがある。

久世(1993)によれば、親子関係は、親からの一方向的な権威の型が際立つ児童期から、初期青年期、成人期にかけて相互性へと変化するとされる。児童期における親子関係は、親の主張を子どもが受容するという過程であるのに対し、初期青年期には親に対して仲間と同じような関係を模索し始め、自律性の発達にともない、相互協調的な関係に変化していく。

これは、Hさんが、母親の求めに応じようと一方向的に受け入れ、母親による評価を基準とした自己規定がされていた前思春期から、思春期に入って「他のことを探し始め」、母親とは違う独自の自己を作っていく、「完全に分かったって感じではな」くとも、お互いを個人として認めて付き合っていく関係へと変化していくという過程と一致するものであろう。

粘土表現においては、母親に見てほしくて近づこうとしていた前思春期から、壁によって隠された、母親に「見せない部分」が現れ、壁の切れ目を通して相互理解が進み、現在に至って「見せていない部分」は小さくなり、距離も近くなるという形で示された。「見せてもいい」と思えてきているというのは、母親による自己規定から脱して自己が確立されてきているからこそと思われる。「母娘でもあるけど、一個人どうしの付き合い」と語られるような関係が築かれるには、いったん母親から離れて独自の自己を形成することが必要になるのではないだろうか。

Hさんと対照的と思われる粘土表現として、Iさん(19歳女性)の作品がある。Iさんは、全ての時期を自分と母親を表す二つの人型の粘土を使って表現したが、前思春期には斜め後ろで見守る存在であった母親[写真12・左が母親]が、思春期に入ると横に並んで体の一部がIさんと溶け合い、帯のようなものでつながっている[写真13]。これについてIさんは「距離

は離れたけど、依存してるというか、頼ってる」「悩み事が沢山できた時期で、自分の考え方もすごく変わった時期で、その相談を母親にすごくしてた」時期であったと語っている。また、現在の粘土表現においてはそのつながりは切れるが、距離は縮まり、二人が横に並んでいるものが作られた。Iさんの場合、思春期に入るとは自分の悩み事が増え、考え方が変わっていく体験であったが、母親に相談し、頼ることでその時期を乗り切っていった。ここでは、母親とつながることで、距離としては離れることができ、自分の悩みに取り組める支えとして母親が機能していたといえる。「分離を必要とするときには、母親とのつながりを確かめた上で離れていく」という河合（1996b）の言葉に示されるように、つながっているということが、逆説的に分離を可能にしていると考えられる。



【写真12】Iさん・前思春期



【写真13】Iさん・思春期前期

このように見ると、壁ができることと、新たなつながりができることは、一見逆のようであるが、母親を自分と異なる独自の存在と認めて新たに関係を築いていくという共通の過程の、ポジティブな捉え方とネガティブな捉え方の両面を示していると考えられる。

3.5 まとめ

Aさん、Hさんの事例を中心に、粘土造形という媒体を用いたイメージ表現を通して前思春期から思春期を経て青年期に至るまでのプロセスを見てきた。

調査事例において、前思春期についてしばしば「記憶があいまいでイメージがしにくい」という語りが聞かれた。また、その時期の母親は「いるのが当たり前」「自然すぎてあまり意識していなかった」といった、個人というよりも環境に近いものとしての母親イメージが多く語られていた。AさんやHさんの事例においても、前思春期の母親は絶対的な存在であり、自分のあり方の基盤となっているものである。

思春期の訪れは、「崖から落ちる」ような体験と語った協力者がいたように、自分の存在様式の変換を迫られるような衝撃的な体験であると思われる。前思春期と思春期の粘土表現において、多くの事例で「自分」の表し方に質的な変化がみられたことから、自己イメージの変容を遂げるひとつの境界がこの時期にあることを示しているように思われる。それは、それま

での母親を基盤とした自己からの脱却であり、ここにおいて、母親は「当たり前」の存在から、自分とは別の意思を持った別の人間になっていく。

「母の守り」(河合, 1996a) について述べたが、それを絶対的なものとして無自覚に信じることができるのは前思春期までといえるのではないだろうか。思春期に入り、母親を別の人間であるとして相対化するとともに、ポジティブなものであるにしろ、ネガティブなものであるにしろ、母親は自分とは違う意思をもって自分に関与するものであることを、自覚せざるを得なくなる。守りの外の世界に出たときに初めて、守りは当たりの、絶対的なものではなくなり、守りとして実感されるのであろう。

発達の初期には自己との区別すらあいまいだった母親が他者として自覚されることは、守る・守られる、従うという非対称的な関係から対称的・相互的な関係への変化の過程の始まりである。そこから母親とのずれや不一致、分かり合えなさを体験し、それを修正し別個の人間として相互に理解していくことが思春期から青年期にかけての課題といえるだろう。母親を自分とは別の人間であると捉え、対象化していくことは、同時に自己を対象化し、自己の個別性に気付いていくことであり、この過程は相補的に進んでいくものと考えられる。

問題において述べた母親からの分離の性差については、調査事例においてはむしろ、男性において同一化や一体化のイメージがみられ、女性では距離の遠さが強調されるものが多かった。思春期の粘土表現においては、「呑み込まれそう」「母親と戦っているが勝てない」といったイメージが語られたのはほとんどが男性であった。これは、「息子は母の世界から出ることによって、性同一性(ジェンダー・アイデンティティ)を手に入れる」(橋本, 2000)と言われるように、男性にとって自己の形成は母親からの分離と同義と考えられるため、分離が課題として強調されやすく、Aさんの思春期前期における、自分の方に「手を伸ばし」てくる母親イメージのような、近づき、呑み込むイメージが実感されやすいのではないだろうか。

女性の思春期においては、Hさんが「母親とは別のものを探し始めた」と語っていたように、同性である母親と「違う自分」を獲得しなければならないために、その時期の主観的なイメージとしては、距離の遠さが表現されたと考えられる。また、Dさんは思春期後期において、2つのものに分化しているが「同じ形の完成形と未完成形」として母親と自分をイメージしたが、Chodorow (1978 / 1981) の述べるように、女性の場合、個として分化していく過程と同一化していく過程が重なり合っており、分離を分離として、同一化を同一化として一つの方向性のみで捉えられない複雑さがあるものと考えられた。

ここに示されたのは、大学生という立場にある青年期の人が、前思春期から現在にかけてどのような母親との関係を持ち、それがどのようなイメージとして表現されたかという事例であった。前思春期から思春期に入り、青年期へと至る過程が、母親との関係の変容過程に焦点を当てて語られうるものであること、それがイメージ表現としても造形の変化で表されることが示された。ここから、前思春期、思春期、青年期というそれぞれの時期を特徴付ける母親と

の関係のあり方について、またその変容過程がどのように進んでいくかについて、ひとつの示唆が得られると思われる。

3.6 今後の課題

母親との関係について調査を行うにあたり、今回は、粘土造形によるイメージ表現と、それを基にしたインタビューという方法を取った。粘土という触覚を介する調査方法により、作りながら何度も修正を重ねて自分の内的なイメージに近づけようとする中で、「これだという感じ」を得られる一方で、出来上がった作品を見ながら、時には触りながら語っていくうちに、語られたイメージと粘土表現とのずれが生じ、それによって当初語られた関係と微妙に異なるイメージが語りなおされるということもあった。粘土で表現するだけでなく、それについて言葉で語るという過程を経ることで、目に見える作品と語りを一致させようとする際に生じるイメージからのずれも、新たな視点を生じさせ、その相互作用が細部にわたってイメージが深化していく手がかりとなったと考えられる。

造形活動そのものではなく、それを通してあるテーマについて表現し、語ってもらおうという方法を取ることの意義については、言語のみで語ることとの違いや、調査後の作品の扱いなど、まだまださまざまな検討が必要と思われる、今後の課題としたい。

また、今回は母親と自分との関係のみに焦点を当てたが、一体感や分離のあり方をみていくためには、母親との関係だけでなく、友人関係などの他の対象との関係についても考慮する必要があると思われる。また、橋本（2000）が指摘するように、一体感と分離というテーマは、生涯を通して繰り返されるテーマであり、母親側の視点からも見ていくことが必要であろう。

〔引用文献〕

- Blos, P. (1962) *On adolescence: A psychoanalytic interpretation*. New York: Free Press. (野沢栄司〔訳〕
(1971) 青年期の精神医学 誠信書房)
- Chodorow, N. (1978) *The Reproduction of Mothering*. University of California Press. (大塚光子・大内
菅子〔訳〕(1981) 母親業の再生産：性差別の心理・社会的基盤 新曜社)
- 橋本やよい (2000) 母親の心理療法 日本評論社
- 東山紘久 (1994) 箱庭療法の世界 誠信書房
- 平野徹 (2006) イメージが賦活させる体験についての考察—粘土制作課題に伴う「身体感覚」を中心として— 佛教大学教育学研究科平成19年度修士論文
- 池田幸恭 (2006) 青年期における母親に対する感謝の心理状態の分析 教育心理学研究, 54, 487-497.
- 片畑真由美 (2003) 身体感覚がイメージ体験に及ぼす影響 心理臨床学研究, 21 (5), 462-470.
- 金政祐司 (2009) 青年期の母—子ども関係と恋愛関係の共通性の検討：青年期の二つの愛着関係における悲しき予言の自己成就 社会心理学研究, 25 (1), 11-20.
- 河合隼雄 (1977) 無意識の構造 中公新書
- 河合隼雄 (1996a) ファンタジーを読む 講談社 + a 文庫

- 河合隼雄 (1996b) 大人になることのむずかしさ [新装版] 子どもと教育 岩波書店
- 久世敏雄 (1993) 青年期の親子関係とその変容 原岡一馬 [編著] (1993) 人間の社会的形成と変容
ナカニシヤ出版
- 三好智子 (2006) 青年期初期の同性友人関係が有する発達の意味とその性差について 京都ノートルダ
ム女子大学心理学部・大学院心理学研究科 研究誌「プシュケー」5. 25-44.
- 水本深喜, 山根律子 (2010) 青年期から成人期への移行期の女性における母親との距離の意味: 精神的
自立・精神的適応との関連性から 発達心理学研究 21 (3), 254-265.
- 中井久夫 (1978) 思春期患者とその治療者 中井久夫・山中康裕 [編集] (1978) 思春期の精神病理と
治療 岩崎学術出版社
- 西村洲衛男 (1978) 思春期の心理—自我体験の考察— 中井久夫・山中康裕 [編集] (1978) 思春期の
精神病理と治療 岩崎学術出版社
- Sullivan, H.S. (1953) *The Interpersonal Theory of Psychiatry*. W.W.Norton, NewYork. (中井久夫 [訳]
(1990) 精神医学は対人関係論である みすず書房)
- やまだようこ (1988) 私をつつむ母なるもの 有斐閣
- 安原青兒 (2006) 福祉のための芸術療法の考え方: 絵画療法を中心に 大学教育出版

(おおはし さやか 教育学研究科臨床心理学専攻修士課程修了)

(指導教員: 石原 宏 准教授)

2011 年 9 月 30 日受理

